

ヒューマンウェアインターンシップ報告書

3 / 4

インターンシップ体験記 (海外インターンシップの場合は英語で記入)

ヒューマンウェアイノベーション博士課程プログラムにおける活動の一環として、大手 IT 関連企業の研究開発インターンシップに参加しました。以下では、本インターンシップ参加に際して、準備期間における活動から、インターンシップから得られた経験や知識、および、参加期間中の生活についてまとめます。

準備期間

本インターンシップについては 6 月に指導教員から受入企業の研究開発インターンシップ参加に対する提案をいただいたことが契機となりました。報告者個人としても学会等で受入企業の産学連携担当者との面識があり、受入企業の活動や社風について一定の理解・興味を持っていたことから、本インターンシップ参加について積極的に準備を進めていくことになりました。

はじめに、前述の産学連携担当者に対してインターンシップ参加への意欲と応募に関わる一連の手続きについて案内を希望する旨の連絡を行いました。翌 7 月に案内いただいた応募様式に従って受入企業で実施したい研究テーマの提案を行い受入企業の研究者とのマッチングを待ちました。約 2 週間後、無事マッチングが成立し、提案した研究テーマに対して興味を持っていた研究者とのオンライン面談を実施しました。その結果、面談の翌日にインターンシップ受入のオファーをいただき、受入企業へのインターンシップ参加が決定しました。受入開始時期については、博士論文の審査等の関係もあり、指導教員と受入担当者の方との相談の上、9 月からインターンシップを開始することとなりました。

インターンシップの目的

本インターンシップの目的は受入企業が保有するデータを活用した研究開発を行い、その成果を論文として出版することです。この目的はインターンシップ受入の条件の一つでもありますし、報告者自らの目標でもあります。本報告を執筆時点において、国際会議への論文投稿に向けて研究活動を継続しています。

インターンシップで得た経験・知識

本インターンシップを通じて以下の経験・知識を得ました。

- 企業が保有するデータの豊富さ：所属研究室では、自身の研究テーマに応じて目的のデータを収集し、データの分析を通じて得られた知見から手法の提案を行ったり、提案した手法の性能評価を行ったりしています。実際に運用されているサービスのデータを利用する場合もありますが、利用できるデータはそのサービスが保有するすべてのデータのごく一部である場合がほとんどです。一方、企業におけるインターンシップでは、その企業が保有するデータの多くを利用でき、その量や種類の豊富さに圧倒されます。そのため、与えられた研究環境の中で大量のデータを効率よく処理する技量が求められました。報告者の場合、自身の研究でも大量のデータを処理する経験を持っており、また、高性能な計算用サーバを利用する権限をいただけたため、データの取扱いについては大きな問題なく研究を進めることができました。
- 作業と時間の管理：企業が保有するデータはその企業から貸与される PC やサーバ上でのみ取り扱うことができます。そのため、所属研究室での研究と比較して、研究活動がインターンシップ先企業の勤務時間に制限されるという違いがあります。上記の通りデータの処理に時間を要する場合、事前に作業を行うタスクとその時間の管理を適切に行わないと勤務時間内にやろうと思っていたことができない（作業が翌日に持ち越しとなる）といった悪影響が生まれます。そのため、勤務終了後に翌日のタスクについて整理を行い、作業予定の結果についても単純な予想だけでなく、その予想に反したときにどのような対応や作業が必要になるかといったより具体的な内容を考えるように努めました。インターンシップ開始当初はデータの処理にかかる時間の見積りを誤る等でその日に予定していた作業を完了できないことがありましたが、時間が経つにつれてそのようなミスも減っていきました。

インターンシップ体験記 (続き)

- 研究とビジネスの両立：本インターンシップの目的はインターンシップ中の研究成果を論文としてまとめて発表するという点にありましたが、どのような研究でも良いということではなく、企業における研究としてビジネスに繋がる価値という基準が明確に求められたと感じています。研究によって得られた成果が実際のサービスにどのような形でフィードバックできるかという視点は、普段の研究活動では明確に意識することがなかったため新鮮な経験でした。経験がないなりに考えて研究を進めましたが、この点については自信を持てる明確な答えを未だ持てていないのが正直なところです。幸いにも、インターンシップ期間終了後もインターンシップ中の研究を継続する機会をいただいたので、研究を進めながら改めて思考を深めたいと考えています。

インターンシップ期間中の生活

参加企業が東京と大阪を含め複数の地域にオフィスを保有しており、また、博士論文の審査の関係で、インターンシップ参加期間開始 1 ヶ月は東京オフィスで勤務し、残りの期間は大阪オフィスで勤務するという変則的な形でインターンシップを実施することとなりました。

- 研究の進め方について：本インターンシップは既存の研究プロジェクトに参加し、複数人のチームで共同して進める形式ではなく、受入担当者の研究員の方との共同研究に近い形で研究を進める形式のものでした。そのため、出勤時の作業や活動については大学での研究と大きな違いはなく、スムーズに環境に慣れることができたと思います。また異なるオフィスでの勤務についても、その環境は両オフィス間で差はほとんどなく、受入担当者の方とのミーティングもオンラインで行うなどで対応していただきました。これらの点については、大手企業であるからこそ可能な勤務形態であったと思います。
- 宿泊について：東京オフィスでの勤務期間中はオフィスから徒歩圏内のホテルを手配していただきました。また、大阪オフィスには自宅から通ったため、インターンシップ期間中の宿泊について、自ら手配をすとか宿泊費を負担するといったことはありませんでした。
- 食事について：東京オフィス・大阪オフィスともにオフィス周辺の飲食店は料金が安い店が多かったため、東京オフィスでは併設の社員食堂、大阪オフィスではコンビニで昼食を取っていました。朝食や夕食、休日の食事については、東京オフィス勤務時はホテル周辺の飲食店やコンビニ大阪オフィス移動後は自宅で自炊をしていました。
- 休日の活動について：前述の通り勤務時間外に研究に関する作業を進めることが困難であったため、休日や勤務時間外では所属研究室での研究に関する作業を行っていました。ある程度の成果がまとまってきたインターンシップ期間終盤では、インターンシップ研究の論文の執筆などを行うこともありました。

まとめ

本インターンシップを通じて、大学における研究と企業における研究の違いのような、言葉や伝聞としてしか知識がなかったことに対して、実際の研究活動により非常に多くの経験と知識、能力が得られたと同時に自信に不足している点について改めて認識することができた非常に貴重な時間であったと感じています。また、本インターンシップ参加に際して受入企業からの給与の支給や本プログラムによる日当等の経済支援があったことも、インターンシップに専念でき多くの経験が得られた要因です。受入企業の担当者の皆様方、また、本プログラムに対して感謝を申し上げますとともに、本プログラムの履修生に限らず企業へのインターンシップ参加を考えている学生に対して「すぐにでも行くべき」というメッセージをもって本報告の結びといたします。